

たら、たとえ今の桜川をきれいにしたつて意味がないです。夏の水期には湖から水が逆流してくるんですから。だから桜川をきれいにすることを望む事は、霞ヶ浦をきれいにするという事でもあるんです。このまま放置したら、どこもかしこも、二、三年のうちに、どろどろになつてしまふんじゃないですか。

△運送業主▽

桜川

滝田勝

謡曲「桜川」の一節にさう。「これは常陸の国磯部寺の住僧にて候。又是れに渡り候ふ幼き人は、何くとも知らず思僧を頼む由仰せ候ふ程に、師弟の契約をなし申して候。又此のあたりに桜川とて花の名所の候。今を盛り

歌。「筑波山、此の面彼の面花盛り。花盛り。雲の林の陰茂き、緑の空もうつろふや。松の葉色も春めきて、嵐も浮ぶ花の波。桜川にも著きにけり、著きにけり。」ここにいう桜川は、古い研究では「常陸国志などには真壁郡にありとあれど、西茨城磯部の神全寺（土俗磯部寺と云ふ）のことならんとの説もあり」と註釈しており、また「捨葉抄には、みな川の清流なりとあれど、西茨城郡東那珂村磯部を流るる桜川のことを云へるなるべし」ともいつている。新しい研究で定説がどうなつてゐるか、今は調べる余裕がないままに、私は土浦の旧市街の南縁を東に流れる桜川を、当然のように、謡曲「桜川」の舞台である桜川ときめこんでゐる。

謡曲の「桜川」の物語は、九州のさる貧しい母の苦しみを見るに忍びず、桜子（さくらこ）と呼ぶ、その思ひ子が人商人に身を売つて、東の方へ下るが、身の代と文を人商人に託して母のもとにとどけるが、文よむ母は狂わんばかり、子を慕い、泣く泣く送いでて東国に向い、今は桜川に流るる花をすくう狂態をみせてゐる。そこへ